

## 討議メモ (深澤)

### 1. 近代宗教経験論と脱文脈化の問題

- ・ 宗教経験論＝近代宗教／宗教学の代表的宗教本質論→再帰的に宗教状況に還流
- ・ 宗教経験論の推移→キリスト教的経験論から普遍的経験論へ (cf. ベーメ、アルノルト、シュライアーマッハー、ジェイムズ)＝脱文脈化(＝普遍化)的展開
- ・ 90年代以降の近代宗教学批判→普遍主義的脱文脈化の所産としての宗教概念や宗教経験概念への批判→これらの概念の「歴史化」「再文脈化」への強い要請＝宗教経験論の脱エピステモロジー化
- ・ 他方で、英米宗教哲学を中心に、なお宗教経験への普遍化的・認識論的関心は強い(但し「哲学的神学」の流れは、キリスト教特殊な正当化の関心が強い)。
- ・ また宗教思想や宗教哲学、さらにニューエイジやスピリチュアリティなどの思想運動では、なお普遍主義的宗教経験論は根強く残る。

### 2. 拙論の位置

- ・ 80年代以来のいわゆる神秘主義論争(疑似普遍神学としての近代神秘主義論と普遍的体験コア論への批判、神秘体験の伝統依存性の強調)後の研究状況という背景。
- ・ 体験／解釈二分法や、体験の現象性格・認識価値への拘泥に対する更なる批判としての系譜学的議論と、宗教経験への認識論的関心の分裂・対立
- ・ ひとつの回避案としての相対的なテキスト内差異(記述性／解釈性)への着目
- ・ 梁川の見神報告とそれをめぐる言説状況の歴史的特異性
- ・ 宗教経験の言語報告の意味するものへの関心  
(・京都学派の牙城としての『宗教哲学研究』誌への掲載)

### 3. なお残る問題群

- ・ 自己経験と一人称報告というものの性格 「私的言語」(Wittgenstein)の問題 それでもテキストと読み手のネゴシエーションがある。

- ・ 「宗教経験の現象学」の成立可能性？ 「所与性の神話」の含意 経験の現象性格（志向対象、志向様式等）の特定へと誘うテキスト
- ・ authoritativeness(James)という問題 認識論的問題（justificatory force の問題）と同時に、実践的な関わり（報告者と聞き手／読み手との）が問われる
- ・ 系譜学や歴史論と認識論の媒介可能性？
- ・ 普遍主義的脱文脈化とは異なる脱文脈化の意味とは？ 「脱」の運動？

## 【文献】

深澤英隆 『宗教経験からの論証』と概念相対論——R・スウインバーンの証拠主義的立場をめぐって』『東京大学宗教学年報』第 12 号、1994 年、101-118 頁。

〃 「宗教経験と宗教の『基礎づけ主義』の問題」『宗教研究』第 69 巻、1995 年、271-294 頁。

〃 『『神秘主義論争』における体験・個人・共同体』『一橋大学研究年報 社会学』、35 号、1996 年、139-190 頁。

〃 「宗教的生形式と宗教の正当化——英米宗教哲学のコンステレーション」『一橋大学研究年報 社会学研究』第 37 号、209-256 頁。

ロバート・シャープ「体験」、M・C・テイラー編『宗教学必須用語 22』（刀水書房 2008）

Alston, William, *Perceiving God*(Ithaca 1991).

Bagger, Matthew C., *Religious Experience, Justification, and History*(Cambridge 1999).

Barret, Nathaniel F. and Wesley J. Wildman, Seeing is believing? How reinterpreting perception as dynamic engagement alters the justificatory force of religious experience, in: *International Journal for the Philosophy of Religion*, vol.66(2009), 71-86.

Jantzen, Grace M., *Power, Gender, and Christian Mysticism*(Cambridge 1995).

Katz, Steven(ed.), *Mysticism and Philosophical Analysis*(Oxford 1978).

Proudfoot, Wayne, *Religious Experience*(Berkeley 1985).

Suckiel, Ellen Kappy, The authoritativeness of mystical experience: An innovative proposal of William James, in: *International Journal for the Philosophy of Religion*, vol.52(2002), 175-189.

Schwitzgebel, Eric, *Perplexities of Consciousness*(Cambridge 2011).

Taves, Ann, *Religious Experience Reconsidered*(Princeton/Oxford 2009).



「病者」 銅像と家人たち (M. 39. 12)

今日における反基礎づけ主義者の先鋒ともいえる R・ローティが<sup>(29)</sup>、クワインやセラーズなどの成果を集約しつつ目指したのは、内部空間における特権的表象の直認に実在と対応した真なる知識の基礎づけを求めた近代認識論の解体であった。一人称的報告の訂正不可能性は形而上学的というより社会的問題であること、直観とは「ある言語ゲームに慣れ親しんでいること以上でも以下でもない」こと、前言語的意識といったものは、知識成立の因果的条件であってもその正当化の根拠ではありえず、正当化はつねに全体論・整合論的になされざるをえないこと、などをめぐるローティの論証は、スウィンバーンのみならず、今日の宗教哲学の認識論的傾向の喉元につきつけられた問いに外ならない。またローティの示す同じ問題には、もうひとつのアスペクトがある。「もし知識を、観念や言葉の持続的調整によって達成される論証的なものから、われわれが突き動かされたり、言葉を奪われたままある光景に釘づけにされたりする場合のような、何か不可避のものに転換することができるならば、われわれはもはや、競争する観念や言葉、理論や語彙の中からどれかを選択するという責任を負わずにすむであろう」<sup>(30)</sup>。つまり認識論的基礎づけの志向は、討議的实践の責任の回避を動機ともしうるとの指摘である。実際、宗教哲学が宗教を可能な限り内容性を剥奪された知覚的事件に還元するとき、それは見方によってはいわば宗教を痩せ細ったものにするとともに、宗教が社会においてなすべき自己正当化の実践を回避せしめると言えなくもないのである。

澤澤 (1894)

# 見神論評目次

見神論評を出版するに當り信ずる處を陳ぶ

宇佐美英太郎

## 一 原文

予が見神の實驗

網島榮一郎

予は見神の實驗によりて何を學びたる乎

同

見神の實驗に基く神子の自覚

同

## 二 精神病學より見たる見神觀

「見神及「自稱神佛」の精神病學觀

吳 秀三

神佛の發現と精神病

門 脇 眞 枝

## 三 見神の幻覺的迷信的病的見解

網島榮一郎と宮崎虎之助

暮 村 隠 士

神を見たる文士

大 町 桂 月

思想界近時の變調

境 野 黄 洋

井上哲次郎松本文二郎二氏の見解

目 次

近頃の宗教的傾向

## 四 見神を個人の主觀に歸するの論

見神者網島梁川氏に就て

宮崎湖處子

見神の實驗に對する意見

元良勇次郎

病間録を讀む

高 島 米 峰

梁川氏の信仰

志 知 天 淵

## 五 見性的見神觀、道義的向上的意力的見神觀

予が實驗せし見性

尾 戸 長 熊

見神に就て

孤 峰 島 石

見佛辨(參照)

大 内 青 嶺

神を見得する方法

佐 治 實 然

見神

亦 司 繁 太 郎

見神の實驗に對する意見

浮 田 和 民

信仰問題

惠 美 志 乃 武

予の見神(參照)

海 老 名 彈 正

## 六 見神を詩的感想と見るの論

網島梁川氏の病間録を讀む

三 並 良

見神の實驗に對する意見

姉 崎 正 治

## 七 宗教的實驗を基とする見神觀

病間録を讀む

金 子 白 夢

見神の實驗に就て

宮 地 柏 峰

見神者網島梁川氏評論

芙 蓉 道 人

神祕派—網島梁川

小 山 鼎 浦

二種の見神

佐 藤 漱 橋

現代青年の煩悶及信仰

近 角 常 觀

佛陀は光明也壽命也(參照)

同

聖者を論ず(參照)

福 來 友 吉

見神の實驗(參照)

中 島 堅 吉

基督教の見神觀(參照)

片 山 幽 吉

## 八 評論の評論

近時の宗教的傾向に就て

小 山 鼎 浦

見神の實驗に對する世論を評す

芙 蓉 道 人

井上博士の「近時の宗教的傾向に就て」を評す

豹 子 頭

宗教的傾向に對する井上博士の論評を讀む

原 口 竹 次 郎

近時の宗教思潮

時 代 思 潮

宗教狂

萬 朝 報

## 九 告 白

見神の意義を明かにす

網 島 榮 一 郎

# 見神論評目次終